

いのちの終わりに、真実を届ける —さくら総合病院死因究明センターの取り組みと、地域医療への貢献—

医療法人医仁会 さくら総合病院
理事長兼病院長 小林 豊

「社会問題に一石を投じる救急病院の使命」

困窮した救急病院の病院経営の中で、打てる矢をいくつも打って存続をかけて戦い続けなくてはなりません。そんな中で忘れてはならないのは社会貢献という大きな使命です。当方が2011年に当院に着任する前から、細々と取り組んできた死因究明。これを地道に件数を増やすことで様々な知見が得られるようになってきました。しかしながらこの死因究明をはじめとする法医学の領域は学問として発達してきているため、当方が法医学会死体検案認定医を取得したものの、当院では専門家による体系の構築はできませんでした。そこで、2025年1月から法医学会指導医という日本に50人ほどしかいない資格を有する小澤医師に常勤で着任してもらい、この領域をさらに学問としての充実を図るべく舵を切りました。日本には民間病院が展開する「死因究明センター」は類を見ないため、新しい試みとして注目されています。

序章：いのちの最期に立ち会うということ

私たち臨床医は、日々いのちと向き合い、患者さんの回復のために力を尽くしています。

それでも、延長線上にあるはずの「死」と真正面から向き合う機会は、日常診療の中では決して多くありません。

救急では到着直後から分単位の判断が続き、集中治療室（ICU）ではアラームの合間に体温・血圧・脈拍・呼吸といった指標の推移を追い続けます。最善を尽くしても救えない命があり、その直後には、ご遺族への説明、死亡診断書の作成、行政や警察への連絡が続きます。

一つの命の終わりを静かに受け止める前に「事務の流れ」に飲み込まれてしまう——これが現場の現実です。しかし、医療の信頼は「治すこと」だけに宿るのではありません。最期を正確に見届けること、すなわち「見送る医療」もまた、患者さんへの敬意であり、ご遺族への誠実であり、社会に対する医療の責任です。

「なぜ亡くなったのか」という問いは、医学的な疑問にとどまらず、故人の尊厳と、私たちが未来に学ぶための問いでもあります。

この「死を見つめる文化」を地域に根づかせたい——。その思いから、さくら総合病院死因究明センターは2025年1月に新設されました。

責任者には、全国にわずか約50名の「日本法医学会法医指導医」である小澤医師が着任。法医学の専門性と臨床の実務をつなぐ仕組みが、ここから動き始めました。

臨床医が“死”を避けるのではなく、学びの対象として見つめ直す文化を、もう一度地域に取り戻したいと考えています。

第1章：死因究明が果たす社会的使命

死因究明は、単に死因を突き止める作業ではありません。

それは「いのちの物語を完結させる行為」であり、「残された人々を支える行為」です。

ご遺族にとっての核心は、やはり「なぜ亡くなったのか」。結果が変わらなくとも、「きちんと調べてもらえた」「最後まで丁寧に診てもらえた」という実感は、心の整理を確かなものにします。怒りや疑念、自己責任感に押しつぶされそうなとき、事実を根拠にした説明が心を支えます。

医療者にとって、死因究明は“学びの原点”です。自らの診療を検証し、判断を振り返ることは、次の診療の質を高めます。臨床が死から学ぶとき、私たちの医療はより正確で誠実になります。

社会にとっての意義も大きい。突然死や原因不明の死を正確に記録・分析することで疾患の傾向や予防策が見え、医療安全や公衆衛生の底上げにつながります。

死因究明は「亡くなった人のための医療」であると同時に、「生きている人たちのための医療」でもある——この連関こそ、私たちが守りたい価値です。

しかし、この「死因究明」は、現在の日本において大きな課題に直面しています。ご存知の通り、我が国の法医解剖率は世界的に見ても極めて低く、多くの死因が詳細に検証されないまま「不詳の内因死」や「老衰」として処理されている現実があります。

警察が介入する異状死においても、法医学専門医の不足、地域偏在、そして解剖施設のキャパシティ不足から、十分な検証が行き届かないケースは少なくありません。結果として、見逃されるべきでない犯罪死、予防可能だったはずの公衆衛生上の脅威（新興感染症など）、あるいは医療過誤の疑念が、曖昧なまま残されました。

「死」を軽んじる社会は、結果として「生」をも軽んじることになります。大学の法医学教室や監察医制度といった既存の枠組みだけでは対応しきれないこの膨大な「死の検証」の受け皿として、臨床病院が主体となる「公設民営」の死因究明センターの役割が、今まさに求められているのです。

第2章：死後CT検査がもたらした変革

本稿でいう死後CT検査とは、Postmortem Imaging (PMI) / Autopsy imaging (Ai) を指し、以下「PMI」と記します。

近年、PMIの導入が死因究明の現場を一変させました。外表観察だけでは到達できなかった体内の変化——出血、骨折、臓器損傷、気道閉塞など——を、非侵襲的に可視化できるからです。

当院は10年以上前からPMIを取り組んできました。当初は「画像で死がわかるのか」「費用対効果はどうか」といった懸念もありましたが、運用の蓄積がその有用性を裏づけています。

救急搬送後に急変された症例でくも膜下出血や大動脈解離が明らかになる、転倒外傷の重症度が想定より大きい、誤嚥・窒息や大動脈瘤破裂が確認できる——“沈黙していた事実”は画像で語ります。

説明の場では、画像の視覚的説得力がご遺族の理解と納得を助けます。「この部分に出血があります」「ここで破裂が起きています」。言葉だけでは届きにくい現実が、可視化によって穏やかに受け止められていく光景を、幾度も見てきました。

同時に、PMIは“検証の道具”であり“教育の教材”でもあります。生前の画像や経過と照らし合わせ、「診断は妥当だったか」「治療方針は適切だったか」を確かめられる。誠実な振り返りは、亡くなった方への最大の敬意であり、次の患者さんへの最良の対価です。

もちろん、PMIがすべての司法解剖や病理解剖に取って代わるわけではありません。PMIは、むしろその後の対応を決定するための強力なトリアージツールです。明らかな大動脈解離などが特定できれば、ご遺族の負担となる解剖を回避できる可能性が高まります。一方で、薬物中毒が疑われる場合や複雑な病態では、PMIは解剖のロードマップとなり、より迅速で的を絞った検証を可能にします。

当センターの役割は、この法医学的・臨床的ベストミックスを判断し、ご遺族の心情に寄り添いながら真実を追求することにあります。

第3章：現場の実践と学び

さくら総合病院では、年間約1,300件のPMIを実施してきました。警察からの検案依頼、院内死亡症例——いずれも一件ごとに背景と物語があります。

ある夜、「自宅で突然倒れた」との連絡で搬送された60代男性。外傷は明らかではなく、心原性の急変が疑われました。PMIでは大動脈解離による心嚢血腫を認めました。静かに画像をお示しすると、奥様は「苦しまずに逝ったのですね」と涙ながらに述べられました。

その言葉に、私たちは「見送る医療」の意味を改めて噛みしめました。

もう一例、対照的な学びをもたらした症例です。高齢者施設で転倒後、会話は可能だったものの、数時間後に容態が急変し亡くなられた80代女性。臨床的には脳卒中が疑われましたが、PMIで高位頸髄を中心とする重篤な頸椎損傷を確認しました。

この知見はカンファレンスで共有され、転倒症例の初期評価とトリアージの見直しにつながりました。臨床経過だけでは見えにくい「隠れた外傷」を客観的に明らかにできることも、PMIの重要な役割です。ご遺族の納得だけでなく、医療者が診療を誠実に振り返るための鏡として、PMIは機能します。

現場は派手さとは無縁です。静かな対話を積み重ね、事実を確かめ、次に生かす。

センターでは、医師・放射線技師・看護師・事務が一体となるシームレスな体制を敷き、「1件ごとの丁寧」を徹底しています。検査、説明、各機関連携——全工程をひとつの医療行為として扱い、どの職種も「人の最期に向き合う」意識を共有しています。

スタッフは検査前に短く黙礼し、心を整えて臨みます。日々の所作にしみ込んだ敬意と誠実さが、当センターの力です。

第4章：地域医療における信頼の循環

死因究明は、亡くなった方を調べる行為であると同時に、生きている人たちの信頼を守る行為です。

「この地域の医療は、最期まで責任をもって見届けてくれる」——そう感じていただけることが、医療への根源的な信頼につながります。

当センターは、地域の先生方・警察・行政と密に連携し、検案依頼、症例相談、ご遺族への説明支援を担っています。現場で判断に迷われる症例や、説明が難しいケースがありましたら、どうぞご相談ください。

突然の依頼や夜間対応でご負担が生じやすい現実も承知しています。だからこそ、依頼・相談・撮影・説明のプロセスを標準化・明文化し、どの施設からも安心してアクセスできる体制づくりを進めています。若手医師や多職種向けの研修・実習、PMI所見と臨床経過を対比するCPC（臨床病理検討会）の公開開催、死亡診断書（死体検案書）の実務研修も順次整備し、センターを学びのハブとして機能させます。

当センターの知見は、決して院内に留めません。地域の先生方と積極的に共有し、医療の質をともに高めていきます。

死因究明は、医療・警察・行政・司法が交差する複雑な領域であり、制度的課題も少なくありません。だからこそ、専門性を持つ公的拠点が地域に根づき、継続的に責務を果たす必要があります。

さくら総合病院死因究明センターは、その一翼として確かな役割を担い続けます。

終章：いのちを見送る医療の、静かな使命

死因究明センターの仕事は、決して派手ではありません。華やかな治療の現場とは対照的に、静かな時間の中で淡々と進んでいきます。

けれども、その静けさの奥に「いのちを見送る医療」の原点があります。

“死”を扱うのではなく、“いのちの最期”を見届ける——この姿勢こそが、医療の誠実さを社会に示す最も確かな方法です。

亡くなった方への敬意、ご遺族への思いやり、そして次の医療への学び。

私たちはこれからも、科学的な知見と人間的なまなざしを携え、ひとつひとつの「なぜ亡くなったのか」に向き合い続けます。

死因究明が「誰かの心を支える医療」として、地域の先生方とともに信頼の礎を築いていけることを願います。いのちの終わりに、真実を届けること——それは、医療に携わる私たちが未来に向けて果たす、静かで確かな使命です。